

ヘレン・シャルフベック —魂のまなざし

Helene Schjerfbeck : Reflections

Press
Release

報道用資料Ⅱ
2015年12月
改訂版

このたび、神奈川県立近代美術館 葉山では2016年1月10日(日)より、「ヘレン・シャルフベック—魂のまなざし」展を開催します。この展覧会は、これまで日本でほとんど知られていなかった、フィンランドを代表する画家ヘレン・シャルフベック(1862-1946)の創作の全貌を紹介するものです。

シャルフベックは3歳のときの事故で足が不自由になりました。11歳で絵の才能を見出され、1880年、18歳で奨学金を得て芸術の都パリに行き、最先端の美術に触れ、マネ、セザンヌ、ホイットマンなどの影響を受けました。また、フランスのポン＝タヴェンや、イギリスのセント・アイヴスなども訪れています。

フィンランドに戻り、1890年代にはヘルシンキの素描学校で教鞭を執るものの、病気療養のため1902年にヒュヴィンガーに転居します。ここでの15年間にシャルフベックの芸術は大きく展開し、彼女独自のモダンなスタイルが確立されていきます。

独立前後のフィンランドという激動のなか、過去と同時代の芸術を探求し、身近なもの、そして自分自身を深く見つめたシャルフベックの魂の軌跡ともいえる作品をご覧ください。



1

2

3

4

5

1. 《自画像》1884-1885年 油彩・カンヴァス フィンランド国立アテネウム美術館 Friends of Ateneum Collection, Ateneum Art Museum, Finnish National Gallery/Hannu Aaltonen

2. 《自画像》1895年 油彩・カンヴァス 西ニューラント郷土博物館 Provincial Museum of Western Nyland, Ekenas, Finland, Finnish National Gallery/Hannu Aaltonen

3. 1890年頃のシャルフベック Finnish National Gallery

4. 《黒い背景の自画像》1915年 油彩・カンヴァス フィンランド国立アテネウム美術館 Herman and Elisabeth Hallonblad Collection, Ateneum Art Museum, Finnish National Gallery/Hannu Aaltonen

5. 《黒い口の自画像》1939年 油彩・カンヴァス デイドリクセン美術館 Didrichsen Art Museum, Finnish National Gallery/Hannu Aaltonen

6. 《快復期》1888年 油彩・カンヴァス フィンランド国立アテネウム美術館 Ateneum Art Museum, Finnish National Gallery/Hannu Aaltonen



<関連企画>

○オープニング・トーク

1月10日(日) 午後2時-3時

講師: 水沢 勉(当館館長)

○学芸員によるギャラリー・トーク

2月20日(土)、3月12日(土)

各日午後2時-2時30分

○「志村ふくみ、シャルフベックを語る」→都合により中止となりました。

1月23日(土) 午後2時-2時40分

講師: 志村ふくみ(染織家)

聞き手: 水沢 勉(当館館長)

○ゲスト・トーク

2月6日(土) 午後2時-3時

講師: 佐藤直樹(東京藝術大学准教授)

* 関連企画はすべて申込不要、無料

(ただし「ヘレン・シャルフベック」展の
当日観覧券が必要です)

会期: 2016年1月10日(日)~3月27日(日)

休館日: 月曜日(ただし1月11日と3月21日は開館)

開館時間: 午前9時30分-午後5時(入館は午後4時30分まで)

観覧料: 一般 1,200円(1,100円)/20歳未満・学生 1,050円(950円)、

65歳以上 600円、高校生 100円

* ()内は20名以上の団体料金です。

* 中学生以下、障害者手帳をお持ちの方は無料です。

その他の割引につきましてはお問合せください。

* ファミリー・コミュニケーションの日: 毎月第一日曜日(今回は2月7日と3月6日)は、18歳未満のお子様連れのご家族は優待料金(65歳以上の方を除く)でご観覧いただけます。

主催: 神奈川県立近代美術館、NHK横浜放送局、NHKプロモーション、日本経済新聞社
後援: フィンランド大使館、フィンランドセンター/特別協力: フィンランド国立アテネウム美術館
協賛: 損保ジャパン日本興亜、大日本印刷/協力: フィンエアー、フィンエアーカーゴ

神奈川県立近代美術館 葉山 〒240-0111 神奈川県三浦郡葉山町一色2208-1
info.kinbi.474@pref.kanagawa.jp / tel. 046-875-2800 / fax. 046-875-2968
広報担当: 土居、川人、児矢野 展覧会担当: 初山、土居

ホームページ <http://www.moma.pref.kanagawa.jp>
公式ツイッターアカウント @KanagawaMoMa

「ヘレン・シャルフベック ―魂のまなざし」展によせて

マヌ・ヴィルタモ駐日フィンランド大使からのメッセージ



シャルフベックについて

フィンランドで最も人気の高い女性画家と言ってもいいと思います。2012年にフィンランド国立アテネウム美術館で開催された大回顧展では、フィンランド史上3番目の動員数を記録したほどです。また最近ではオークションで高値で落札されており(※)、芸術的価値とともに美術市場でも関心が高まっているように感じます。

シャルフベックは幼い時の怪我や、2度の失恋など何回か不幸に見舞われていますが、それが作品にも影響を与えていて、自分が失ったものを作品を制作することで埋め合わせていたような気がします。そういう点から作品を見ると非常に興味深いです。

※2009年のオークションでは油彩画が3,044,500ポンド(日本円にして約6億円)で落札されている。



《アイトクーネから来た少女Ⅱ》1927年 油彩・カンヴァス
フィンランド国立アテネウム美術館
Yrjö and Nanny Kaunisto Collection, Ateneum Art Museum,
Finnish National Gallery/Hannu Aaltonen

本展について

シャルフベックの初期から最晩年までの厳選された作品が展示されているので、シャルフベックの画業の全貌がわかる、よく構成された展覧会だと思います。(東京展の)内覧会では予想を上回る大勢のお客様にお越しいただき、驚きとともに大変嬉しく思いました。会期中ひとりでも多くの方にご覧いただけることを願っております。

本展で一番好きな作品

1927年制作の油彩画《アイトクーネから来た少女Ⅱ》です。勿論他にも好きな作品はあるのですが、本作はシンプルな色使いが多いシャルフベックにしては珍しい色を使っているのも、とても印象に残りました。

染織家 志村ふくみさんからのメッセージ



撮影／大石芳野 写真提供／求龍堂 ©Yoshino Oishi

再会

今から18年前、遠いフィンランドの美術館ではじめてその画を見て、私は深く心を打たれ、その画集を大事に抱いて帰国した。

そのヘレン・シャルフベックに再び会えるとは、夢ではないか。その当時誰にたづねてもその名を知る人はなくて、私はひとり胸に刻みこむように大切にしていた。

私にとつてのヘレンは異国の画家ではない。いつの世でか出会った魂の結びつきを感じている。

——志村ふくみ(「ヘレン・シャルフベック―魂のまなざし」展によせて 2015年5月)

最初に出会った時、風もないのに私の中の何かが揺れた。併し、私が漠然と感じたより、ずっと、類稀な感受性の持ち主、というより、怖いほどの冷徹な客観性に貫かれた人ではないかと思いはじめた。はじめ北欧のひとりの女性の画家という入り口から入ってみて、私のそんな概念は吹き飛んでしまった。次第にヘレンの内面世界が透かし模様のように浮かび上がってくると、それは老年をむかえた私自身の内面とかさなって思いがけない境域に導かれてゆくのだ。どのような生涯をおくった人が、奥の方から漂ってくる気配はかぎりなく優雅だ。色彩は他の人にはない繊細な驚きをもっていて、その二、三滴の魔術のような色合が全体をにじませ、現実から少し浮上させながらどこからか漂ってくる光の中にかぎりないやさしさをしっかりと繋ぎとめる意志をもっている。優しさとかたくなさ、一徹な仕事、傷つきやすい魂、この人の生涯には必ず何かあったにちがいない。それも幼い時に、その人生を決定するようなことが。私は漠然とそう感じ、それは私の人生とも重なっていた。(志村ふくみ著『母なる色』求龍堂、1999年)

脳科学者、作家、ブロードキャスターの 茂木健一郎さんのエッセイ

純粹なる幸せの感情

画家は、どのようにして成長して行くのだろうか？

その独自の画風の萌芽は、初期作品にすでに現れているのであるが、注意深い観察者でも、そして、画家本人でさえも、種の所在に気づかない、そんなことがあるのではないかな。

ヘレン・シャルフベック展の会場に入ったとき、最初の方に並んでいる精細な具象画にまずは魅せられた。この人は、巧い！同時に、その色使いと、筆の構成に、とてつもないユニークさを感じた。しかし、その正体はわからなかった。

先へと進むにつれて、シャルフベックの独自の画風が展開される。大好きな幾つかの作品の前に立って、うーんとか、ああとか嘆息している時に、その画面構成の色使いと筆致の兆しが、すでに初期作品の中に潜んでいたことに気付かされるのだった。

ああ、一人の人間の成長というもの！すべては変わる。そして、変わらない。展覧会の喜びは、一人の画家の生涯に寄り添えることだろう。なんとという奇跡！とてつもない贅沢！



展覧会を見てしばらく経って、私はフィンランドに旅立った。

画家と風土の関係を、単純にとらえようとは思わない。しかし、風土が画風に何の影響も与えないということもないだろう。

最近の日本は、フィンランド・ブームである。ムーミンや、マリメッコといった、日本人が大好きなフィンランドの文化。初めて訪れるヘルシンキは、素敵な街だった。世界遺産のスオメンリンナには、船で10分ほどで着いた。

潮風に吹かれ、海の青を心に取り入れながら、花が咲き乱れる草原を歩いているうちに、知らず知らず、私はシャルフベックの面影を探し求めていた。

子どもの頃に見上げた、梢の葉々のさざめき。水面をわたる風の表情。淡い恋心、つかの間の安らぎ。ソーダ水の中を、シャルフベックが歩いていく。ああ、種は、やっぱりフィンランドの風土の中にあっただのと、納得したら心が涙を流した。シャルフベックの人生が、幸せ一辺倒だったとは思わない。傷つけられた恋人の肖像、憂いを帯びた自画像。風景画の中にも、その気配は感じられる。

それでも、シャルフベックの絵から伝わってくるメッセージは、純粹なる幸せの感情だと思えるのは、芸術の力というべきなのだろう。

フィンランドの人たちは、やさしかった。冬は寒かろう。厳しい風土の中で、人へのやさしさが育まれた。

偉大なる芸術は、個性への限りないリスペクトに基づいている。人は、シャルフベックの絵に向き合うとき、自分というちっぽけな存在が承認され、抱かれることを感じ、そこに限りない幸せを感じるのだろう。



ご自身初となる展覧会の音声ガイドの収録を終えられたばかりの、小林聡美さんにお話をうかがいました。

聞き手) 音声ガイドの収録お疲れさまでした。シャルフベックや作品について書かれた音声ガイドの原稿を読まれた今、シャルフベックについてのご感想をお聞かせください。

小林さん) シャルフベックは1862年に生まれて、1946年に亡くなったわけですが、ちょうどこの時代は二度の世界大戦があって激動の時代ですよね。そんな時代に女性でありながら18歳という若さでフィンランドからパリに留学できたというのは、本当に早い時期から絵に対する才能のきらめきを見せていたのですね。そして、そのきらめきを死ぬまで持ち続けたとても稀有な意志の強い人という印象を受けました。

聞き手) チラシにも使われているシャルフベックのポートレイトの目を見ても意志の強さを感じます。

小林さん) そうですね。シャルフベックは生涯にわたって節目節目で自画像を描いています。自分の顔を正面から見つめて描き続けることで、自分が何を描きたいのかを常に問い続けていたのかもしれないな、と思ったりしました。

聞き手) 俳優の仕事と通じる点もありますか？

小林さん) 俳優も、自分を見つめて表現するという意味では似ているかもしれません。私は絵を見ながら画家の生涯や時代背景、その時画家が何を考えていたのか…というところまで考えを巡らせてしまうんです。そういう点から言うとシャルフベックの絵は背景を読み取りたくなる作品が多いですね。

聞き手) 例えば、シャルフベックの作品のどういうところがそう思わせるのでしょうか？

小林さん) 具象画でありながら少し抽象っぽい感じを受けるところとか、あんまり描き込んでいない絵が多いので、描かれていない余白が逆に興味をかき立てます。

聞き手) 作品の背景とえば、シャルフベックは失恋を2度経験していて、それが作品にも色濃く反映されていると聞きました。

小林さん) そのエピソードは音声ガイドにも登場しますのでお楽しみに(笑)。でも、ポスターやチラシに使われている《黒い背景の自画像》が描かれたときは恋愛中だったんですよね？

聞き手) 1915年に描かれているので、19歳下の画家、エイナル・ロイターに出会った頃ですね。1919年にロイターが別の女性と婚約することになってシャルフベックは病気になるほどのショックを受けたとか。

小林さん) そうですか、2人が出会った年の作品なんですね。背景は黒いですが表情が華やかですものね。シャルフベックは当時53歳なので大人の恋ですね。若い頃の自画像に比べると頼もこけているし。ただ、すごい自信に満ち溢れた表情なので、「私は普通の女流画家じゃないのよ」という気概をこの絵から感じます。同じ画家のロイターに、これみよがしではなく、自分の積み重ねてきたものを見せつけたかったのかも。いろいろ想像してしまいますねー。

聞き手) 本展に出品される作品も事前にご覧いただきましたが、気になる作品はありましたか？

小林さん) 1905年の作品《お針子(働く女性)》ですね。静けさの中の鋭さがすごく気になります。謎めいた女性の表情も含め、全体的に静かな印象なんですけど、よく見ていくと「はっ、こんなところにハサミが！」みたいな。見ていてドキッとしますね。

聞き手) 最後に小林さんが主演された映画「かもめ食堂」のロケ地で、シャルフベックの故郷でもあるフィンランドについてお聞かせください。

小林さん) フィンランドというかヘルシンキは、ふらりと歩いているだけで素敵な建物に出会える街ですね。駅とか郵便局とかでもフィンランドデザインを感じられます。私がすごく好きだったアール・デコ風の郵便局は何故かカメラ屋さんになってしまったんですけど(笑)。映画にも出てくる建築家アルヴァ・アアルトが手がけたアカデミア書店もすごく素敵ですよ。

聞き手) 「かもめ食堂」の影響でフィンランドに行かれた方も多いそうですね！展覧会ではフィンランドに関連したグッズも販売されるそうです。本日はありがとうございました。



《お針子(働く女性)》1905年 油彩・カンヴァス
フィンランド国立アテネウム美術館
Ateneum Art Museum, Finnish National Gallery/Hannu Aaltonen

音声ガイド

小林聡美さんの語りで、ヘレン・シャルフベックの作品世界をご案内します。音声ガイドでは、スペシャル・ナビゲーターの女優・小林聡美さんに、シャルフベックが残した言葉の数々を朗読していただきます。後年は母国フィンランドから、ほとんど外に出ることなく制作を続けたシャルフベック。作品について、また自身について画家が語った言葉を、さまざまな女性を演じられてきた小林聡美さんの語りでお楽しみいただきます。画家の生涯とともに、作品の技法や当時の美術界など、シャルフベック作品を多角的な視点から解説していきます。



小林聡美さんより、メッセージをいただきました

撮影で訪れて以来、よく訪れているフィンランドの芸術に触れる事ができて、今からとても楽しみにしております。音声ガイドを担当するのは初めての経験なのですが、日本ではあまり知られていないシャルフベックという画家について、作品や背景にある事柄など皆さまにお伝えできればと思います。

プロフィール 小林聡美(こばやし さとみ)

女優。1965年東京都生まれ。代表作は、映画「かもめ食堂」(2006年)、「めがね」(2007年)、「プール」(2009年)、「マザーウォーター」(2010年)、テレビドラマ「やっぱり猫が好き」(1981～91年)、「すいか」(2003年)、「パンとスープとネコ日和」(2013年)など。著書に『散歩』(幻冬舎)、『読ませぬ図書館』(宝島社)など。